

新年の白紙綴じたる句帖かな 正岡子規

令和2年は庚子年。種子の中に新しい生命が兆し始める状態。何かが始まり、未来に向けて育ち始める年だそうです。変化が生まれるということは、チャレンジするのによい年かもしれません。



さて、何を始めるかは、これからじっくり考えるとして、ここ浜松文芸館の展示室は、俳句の世界へ新たな挑戦をしている若手アーティストの皆さんの熱気で輝いています。若手俳人のホープ、高柳克弘氏は、俳句という「座の文学」のもつ余白の部分を、音楽や絵画、造形美術、演劇がどう受け止めて表現してくれるか。そこに生まれる豊かな想像の世界に俳句の広がりを感じました。それは、言葉への挑戦とも言えます。今回、私たち鑑賞する者も、言葉の世界にささやかなる挑戦をさせていただきました。展示室中央に置かれた、桂の枯れ木「寒林」を「言の葉」で豊かな木に変えようという挑戦です。設置されてから2ヶ月。今、枯れ木は、見事に豊かな言の葉の樹に変わりつつあります。訪れる方々は、緑紙の一枚の葉に思い思いの言葉を書き、桂の木の枝に貼っていくのです。その言の葉の幾つかを紹介しましょう。「読み終えて林檎乗せたる紀行集」「歳をとるほどどんどん幸せになる。青春は苦しかった。」「ビー玉の青の融合山眠る」「生かされているんです。俳句に!!」「母一人住むには広き藪椿」「指輪失せ妻には言えぬ秋の暮れ」それぞれのメッセージや俳句に込められている思いを想像すると、その方の人生が見えてくるようです。今更ながら言葉は、単なる伝達手段の道具ではない。思いを伝え合う、奥深い力をもつもの。今年も、悩み苦しみながらも言葉を駆使して文章を書いたり短歌や俳句を作ったり、と言葉の世界に挑戦しましょう。そして、できた作品を皆で分かち合しましょう。浜松市民文芸への投稿もお待ちしております。ねずみ年は、繁栄の年。思わぬ賞を受賞することもあるかもしれません。本年もよろしく願いいたします。



つれづれなるままに・・・家訓は「中庸」

92歳で亡くなった祖母の葬儀の席で、本家第46代当主の伯父がいみじくもこう言った。「〇〇家がここまで続いたのは、代々、中庸の精神で家をつないできたからである。1,300年の家史の中で、傑出した人物も出なかったが、また、とんでもない人間も出なかった。何事もほどほどの精神、中庸こそ、〇〇家の家訓である。心に留め置くこと。」はあーと頭を垂れて聞いてから、早うん十年。さもありなんと納得し、頭の片隅にはあったが忘れていた。

改めて意味を調べてみた。「中庸」とは、両極端に片寄ることなく中正。正しく筋が通り調和がとれていること。孔子曰く、「中庸の徳たるや、それ至れるかな」と、論語にある。かのアリストテレス(ギリシア哲学者)もこの中庸を重要視していたとか。仏教用語の「中道」とはちょっと違うか。

新しい年を迎え、自分を振り返ったとき、なんとまあ自分は、中庸の精神を逸脱した生き方をしていることか、ちらりとそんなことが頭の中をよぎった。確かに、私の性格行動は片寄りがちで、筋を通さなければすぐに憤り、とても調和がとれているとは言えない。新年に、家訓「中庸」を思い出したのも、それを直せということかもしれない。座右の銘など何にも持たない自分だが、「中庸」これを肝に銘じてまずは令和二年を無事に過ごしたい。